

2014年（第49回）ASHP ミッドイヤー臨床薬学会議に参加して

浜松医科大学医学部附属病院 薬剤部

八木 達也 Tatsuya Yagi

はじめに

American society of health-system pharmacists（以下ASHP）ミッドイヤー臨床薬学会議が2014年12月7日から11日にかけて米国カリフォルニア州アナハイムの Anaheim Convention Center で開催された。この度、私は日本病院薬剤師会からの助成を受け、ワルファリンと抗菌薬の相互作用に関わる研究成果の発表と本学会に参加したので、ここに報告する。

写真1（左から浜松医大病院 薬剤師 大澤隆志氏、著者、薬剤部長 川上純一氏、副薬剤部長 内藤隆文氏）



ASHP ミッドイヤー臨床薬学会議

ASHP は、臨床薬剤業務の普及に大きく貢献している学会であり、現在、40,000人を超える学会会員数を有している。1966年、現在のASHPの前身である American Society of Hospital Pharmacists は第1回ミッドイヤー臨床薬学会議を「クリニカルファーマシーを将来の重要な活動領域とすること」を目的に開催した。ミッドイヤー臨床薬学会議は以来、現在まで毎年開催されている。主な開催地は、ラスベガス、ニューオーリンズ、オーランド、そして今回開催されたアナハイムである。

私自身、ミッドイヤー臨床薬学会議はラスベガスで開催された第47回に続き2度目の参加となる。第49回ミッドイヤー臨床薬学会議への参加者数は20,000人を超え、例年通りの盛況ぶりであった。学会の内容としては、特別講演、シンポジウム、ワークショップ、一般・学生・レジデントによる口頭・ポスター発表が主なものであり、複数のセッションが同時進行で行われていた。また、連日、会場の入口にて「News & Views」というニューズペーパーが配布され、当日のトピックスやイベントが紹介されている。学会要旨のみでは把握できない情報もそのニューズペーパーから得ることができ、多くの参加者がその情報を利用してシンポジウムやイベントに参加していた。著名な研究者のみならず、アメリカの有名なコメディアンである Jay Leno 氏による講演など医療関係者でない方もゲストに迎え、現在の医療について客観的な考えを議論するセッションもあり、一部のセッションでは当初予定していた聴衆者数を大きく上回り、急遽、サテライト会場を増設するほどの盛況ぶりであった。その他のシンポジウム、特別講演に関しても会場は満員の状態であり各会場で熱の入った討論が行われていた。



私自身は、「集中治療」「感染症」「循環器」「リスクマネジメント」のワークショップなどに参加した。学会の特性上、上記内容に関してのプロフェッショナルの育成を目的としたワークショップであり、米国では専門薬剤師の育成に力を入れていることを再認識した。ワークショップに関して「すべての大学病院で働く臨床薬剤師が、臨床薬剤業務はもちろんのこと、エビデンス構築に向け日々研究を行っている。また、研究のみならず、教育にも力を入れる必要がある。」との考えを基に様々なディスカッションが行われていることに非常に感銘を受けた。日本でもこのような考えの薬剤師は多く存在するが、アメリカの薬剤師は幅広い年齢層の方々が対等に、そして自身の考えに誇りをもって意見を出しており、アメリカの薬剤師がもつプロ意識の高さに魅了された。

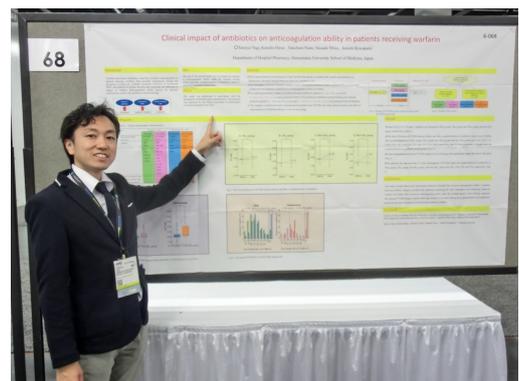
また、2014年に世界的に問題となった「エボラウイルス感染症」について、アトランタのEmory大学病院のNisha Dave氏から講演があった。Emory大学病院はアメリカでの2例目のエボラウイルス感染症患者の治療が行われた病院であり、実際の状況などについて聞くことができた。また、治療を行う際に薬剤師による文献などを参考にしたディスカッションへの参加や消毒に対してのアドバイスによる貢献があったことを知ることができた。

ポスターや口頭発表については、基礎研究、薬物動態に関する研究をはじめ、薬剤師の取り組みに関しての発表が多く見られた。その他、医療経済に関しての発表も多く、アメリカと日本の保険制度の違いによる発表内容の変化についても実感することができた。私自身、薬物動態研究や疫学研究に携わっていることから非常に興味深い発表内容も複数あり、多くの意見交換を行うことができた。

このように、アメリカ各地での各領域での薬物治療の実際を共有すると共に、世界でも最新のトピックスについても聴講することができ、幅広い知識や考え方を身に着けることができる学会であり、今回の臨床会議への参加は私にとって今後、薬剤師として活躍していく上で非常に重要かつ有意義なものであったと考える。

ポスター発表

今回私は、「Impact of antibiotics on anticoagulation ability in receiving warfarin therapy patients」という内容で抗菌薬の種類や相互作用のメカニズムの違いによるワルファリンの抗凝固能に与える抗菌薬の影響について発表した。ワルファリンの使用は世界全体でも一般的であることから、私の発表は受け入れられやすく、アメリカ、中国、インドなど多数の方々から多くの質問を受けた。抗菌薬の併用により抗凝固療法に難渋した経験がある方々からの質問が主なものであった。質問者との討論の中で、国ごとでの感染症治療ガイドラインの違いや食生活などが存在することから、国内外の薬剤師間で着眼点が大きく異なることも分かり、非常に参考になる意見交換を行うことができた。また、今後研究・論文投稿を進めていく上での重要なアドバイスもいただくことができた。



UC Irvine Health Chao family Comprehensive Cancer Center の見学

アナハイムに滞在中、浜松医科大学病院薬剤部長 川上純一氏の紹介を受け、UC Irvine Health Chao family Comprehensive Cancer Center の外来化学療法センターの見学を行った。見学では、外来化学療法センターにおける薬剤師の役割について薬剤師と討論を行った。保険制度、医療安全に対する考え方、薬剤師の教育制度などの国間での違いにより日本におけるがん化学療法の内容、薬剤師の業務内容、化学療法剤の混注業務への薬剤師の関わりに相違がいくつかあり非常に興味深い情報を得ることができた。また、日本とは異なる、薬剤師の医師、看護師、テクニシャンとの連携についても学ぶことができた。経口抗がん剤の指導・取扱い方法に関しても大きな違いがあり、病院と薬局との連携が非常に密なものであり、その連携を活かした患者教育に取り組んでいることが分かった。



おわりに

本学会の参加を通じて、薬物治療の最新状況や薬剤師を取り巻く世界の状況などについて情報共有のみでなく、臨床薬剤師、研究者、学生などと互いの環境について話し合い、国際的な交流を深めることは、薬剤師として視野を広めるうえでも非常に有用なものであると考える。今後も、今回ミッドイヤー臨床薬学会議で学んだことを十分に活かし、臨床業務、研究で成果を挙げ、自身の成果が医療薬学に貢献できるよう、日々励んでいきたい。

謝辞

今回、大変貴重な機会を与えてくださいました、日本病院薬剤師会 北田光一会長、国際交流委員会 折井孝男委員長をはじめ御関係されます先生方に厚く御礼申し上げます。また、今回の発表を支援して下さいました浜松医科大学医学部附属病院薬剤部の皆様方に感謝致します。

写真 1：学会会場入口にて

写真 2：ニューズペーパー「News & Views」

写真 3：ポスター発表

写真 4：UC Irvine Health Chao family Comprehensive Cancer Center 無菌室見学の様子